東久留米市

くるめの文化財

平成４年３月
第８号
東久留米市教育委員会

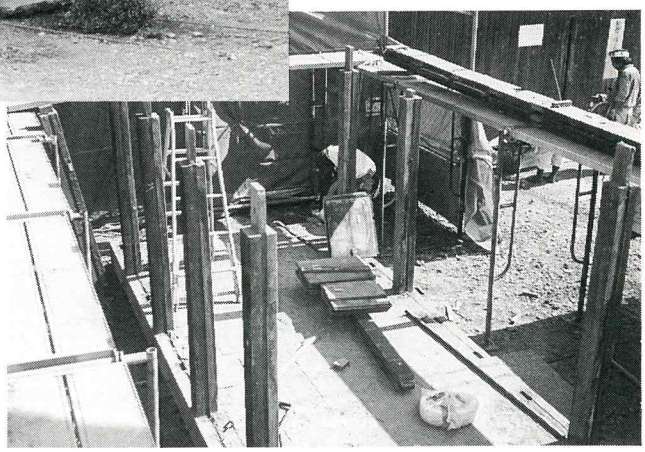
神藤家穀櫃の解体調査

江戸時代の終りごろ、飢饉にそなえて粟や稗などを貯蔵した穀倉・穀櫃が幕府の指示により各村々に造られました。東久留米駅前にある神藤正雄氏所有の穀櫃もその一つと考えられていましたが、市内に残る外のものと比べて規模が大きいことや、構造や建築年代などにさまざまな不明確な点がありました。

この穀櫃が文化財保存のために神藤氏より市に寄贈されることになりました。そこで、市教育委員会では市文化財保護審議会の意見を聞きながら、将来、博物館などに移築して展示するまで解体・調査をして保存することになりました。

解体と調査は、市文化財保護審議会委員で古建築が専門の山崎　弘工学院大学助教授を監修者とし、㈱大門組によって平成３年の８月から９月にかけて行われました。今回はその調査報告を掲載します。

▲穀櫃の全景（解体前、南より）



▼解体調査中の穀櫃
解体と調査は平成３年８月26日から９月４日まで行われた。

神藤家穀櫃の調査

山崎　弘

所在地　東京都東久留米市東本町１－８

所有者　東久留米市（旧神藤正雄氏所有）

☆規　模☆

桁行　２０．５８尺（６．２４メートル）

梁間　６．６３尺（２．０１メートル）

軒の出　側柱芯から垂木先端下端まで

２．６４尺（０．８０メートル）

軒高　土台上端から船枻梁上端まで

８．０２尺（２．４３メートル）

総高　土台上端から棟頂まで

１０．５６尺（３．２０メートル）

床面積　１３．６４平方尺（４．１３坪）

籾の格納高さ　床板上端から最上部横板下端まで４．１４尺（１．２５メートル）

穀櫃としての容積

３室の内　左室　２３．１３石

中、右室　各３０．８０石

合計　８４．７３石

☆構造形式☆

概要　木造、切妻造り、鉄板葺きの建物で、正面１ヶ所（２柱間）に出入り口を設け、片引戸を建てる。

基礎　地盤面に自然石を適宜据える。

軸部　周囲に土台を敷き、中仕切り位置２ヶ所に大曳を掛け、土台上周囲には柱（正面１１本、背面１２本、側面隅柱を除いて各２本を建て頂部に桁、梁を回す。さらに、桁、梁上には周囲に１４本の束をたて船枻梁４本を架ける。束上の各船枻梁間には梁兼用の台輪を掛け渡す。また、中央には中引梁を架ける。

小屋組　和小屋組。船枻梁に小屋束をたて、母屋を渡し、棟木を組み、垂木を配り、野地板を張って鉄板を葺く。

外部　柱には羽目板溝を彫り、羽目板横落し板を通常（土台より桁、梁まで）各４枚を落とす。正面下部の左右２ヶ所に籾出し口を設ける。桁、梁と船枻梁、梁兼用の台輪の小壁は全て堅板張り。

内部　床は土台に大曳を渡して敷目板張り、天井は船枻梁、梁兼用の台輪上の板張り。

建具　正面柱１本を省略し、出入口を設け片引き戸を建てる。妻側梁上の小壁に換気窓（金網張り）を設ける。

☆復　原☆

この穀櫃は江戸時代後期以降に建設された、粟、稗などを貯蔵する飢饉用の箱型の器物である。したがって、当初は出入口も、屋根もなかった。内部を３つに仕切り、各内外部の柱間及び中仕切りには羽目横落し板を柱溝穴に落とし、外壁、中仕切り壁とする（痕跡、写真）。正面のみは各柱間の最上部の落し板１枚分を横倹飩にした横板を嵌め込む。籾を貯蔵するときにはこの板を横にスライドさせて取り外し、次々と下の板を上部まで移動させ外したのである。

３室の正面下部１ヶ所にはそれぞれ籾だし口を設ける（写真）。現状では正面に出入り口を設けた関係で中室の籾出し口はないが、復原するとそれぞれ各室ごとに１ヶ所あったことになる。また、天井は天井根太の痕跡などから桁、梁上位置に天井を張る。それ故、当初は箱型の穀櫃に復原され、けた、梁の上部の小壁、屋根部分は後補となる。

☆建築年代☆

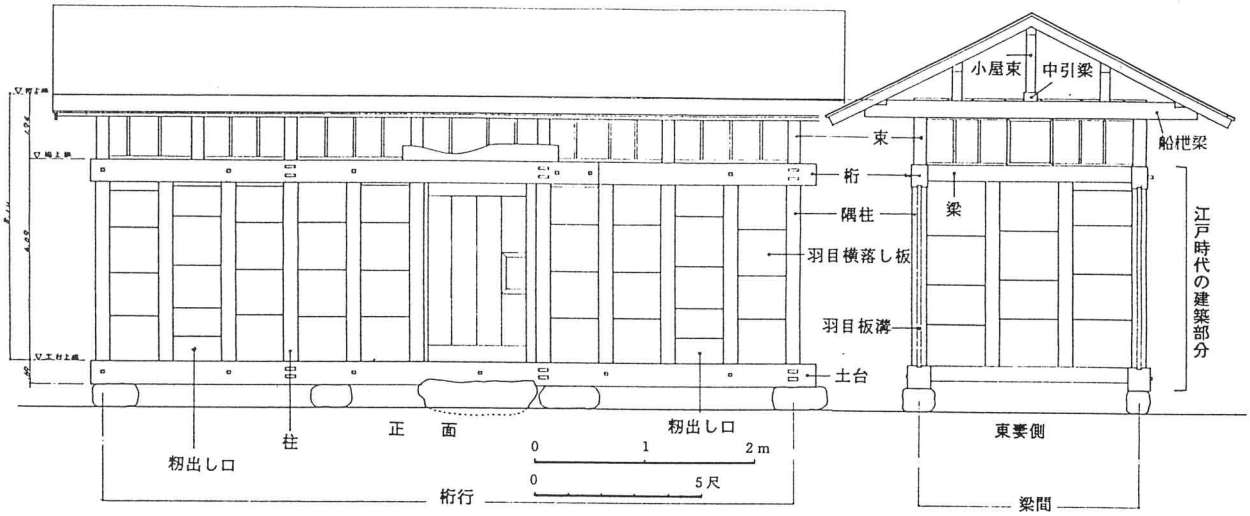
当初の建築年代については不詳である。しかし現存する棟札には次のようにある（写真）。

明治四拾弐年

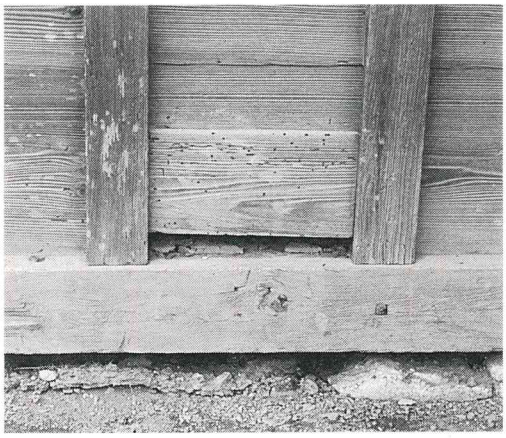
当世七代主　神藤圧太郎

酉拾弐月下旬建之

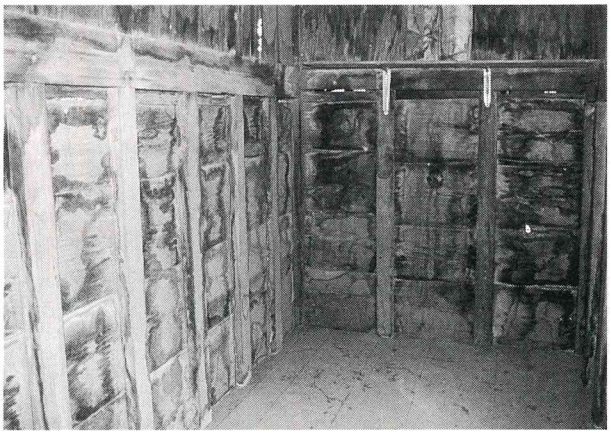
この明治42年の棟札は、神藤家の何らかの建物の内部に保管されていた穀櫃が明治以降になって不要になり、屋敷内の外部に移した時、穀櫃の上部を立ち上げ、屋根を掛け、出入口を設けてさらに天井を船枻梁位置まであげて物置とし



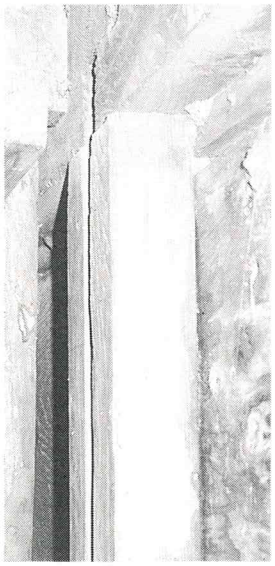
▲穀櫃の正面・側面図



▲粉出し口

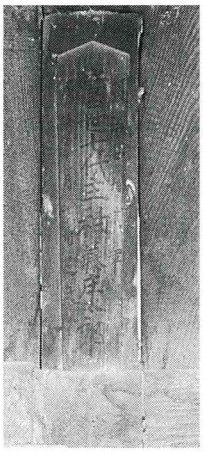


▲穀櫃の内部

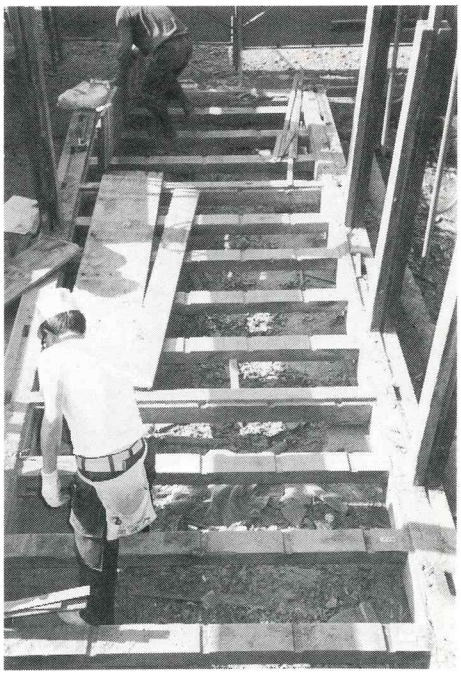


▲中仕切りのための柱の溝

▼隅柱にみられる羽目板溝の痕跡



▲明治42年の棟札



▲解体中の土台と柱

て使用した年代と推定される。ちなみに当時の屋根は扠首痕の痕跡から判断して、茅葺きであったことがわかる。

また、穀櫃の現状規模は中仕切りが２ヶ所ある３室の器物であったが、右端の隅柱竪溝（写真）、土台、梁の鋸刃の姑息な切り口或は各室の桁幅の構成（５．６２尺、７．４８尺、７．４８尺）などを総合して勘案すると、左室の桁幅分だけ伸びる左右対称的な４室構成が考えられる。即ち桁行２６．２０尺（７．９４メートル）、梁間６．６３尺（２．０１メートル）の規模が復原され、その容量は約１０８石が考えられる。即ち１００石入りの穀櫃ではないであろうか。

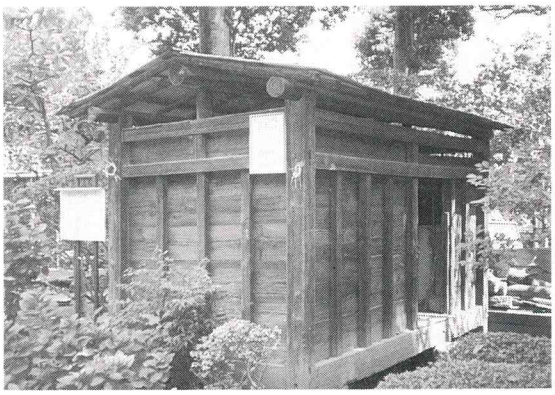
☆参考資料☆

穀櫃

江戸時代特に宝暦年間以降、幕府は度重なる農村の飢饉に対してその対策として粟、稗などの貯穀を奨励し、農村に共同の穀倉、穀櫃を建設させた。市域でも記録によれば寛政元年（1789）には小山村でそれぞれ穀櫃を建て籾を貯穀していた。その後、安政２年（1855）「村村貯穀并穀櫃寸間取調書上帳」（田無公用分例畧記）によれば天保～弘化にかけて数棟の穀櫃の建設が記録されている。そのなかには弘化２年（1845）の建設と一致するものが旧小山村に存在した。市域ではおそらく幕末に多くの穀櫃が建設されたのであろうとおもわれるが、神藤家の穀櫃も同様その頃のものと推定するのが妥当であろう。

神藤家の由来

神藤家の祖先は寛永年間に地頭神谷與之助より一家の当地における功績によって苗字帯刀を許され、神藤の姓を名乗ったとのことであるが、その総本家は明治12年に後継者がなく廃家となった。従って神藤正雄家の先祖は宗家の分家にあたる。神藤家が現在地に移る以前は落合川北側



旧下里村の穀櫃［市指定文化財］
（現在、小山の大円寺に移築保存）

の台地、南沢村下組（現東久留米市本町４－５、屋敷祠が現存、神藤姓が多い）に居住して、江戸時代には代々常右衛門を名乗り名主等の役職を勤めている。明治期に入って７代庄太郎（農業常右衛門の長男、明治８年２月17日生）は村の開発に貢献し、大正４年には武蔵野鉄道（現西武池袋線）の飯能、池袋間の開通に際し、私有地3200坪余を鉄道会社に寄付して東久留米駅を設置させ、現在の市発展の基礎を築き上げた。庄太郎は34才の時穀櫃を改築修理したことになり、また、40才の大正４年には駅前（現在地）に丸通の営業所を開設している。その時荷物の格納場所として穀櫃を移築し屋根の構造を和小屋に変え、鉄板葺きにしたのが現在の穀櫃である（口伝）。

平成３年度、市に文化財を寄付して下さった方
（敬称略）

神藤　正雄（東本町）　穀櫃一棟
多田治三郎（小　山）　縄文式土器片

◎文化財に関するお問い合わせは
市役所　73－5111　内線343
社会教育課　文化財担当まで
＜編　　集＞
東久留米市教育委員会社会教育部社会教育課
〒203　東久留米市幸町3－11－10